

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「パレスチナ／イスラエル紛争の変容：最終的地位と新たな課題」（令和4年度第1回研究会）

日時：令和4年8月5日（金曜日）

午後2時～午後7時

場所：本郷サテライト／Zoom によるオンライン同時開催

報告者名・報告タイトル：

鈴木啓之（AA研共同研究員，東京大学）

「30年を迎えるオスロ体制と諸研究の課題」

15:00-15:50 江崎智絵（AA研共同研究員，防衛大学校）

「中東国際関係にみるオスロ合意以降の変容」

16:00-16:50 田浪亜央江（AA研共同研究員，広島市立大学）

「抵抗と平和構築のあいだ オスロ合意後のパレスチナの演劇活動への視点」

鈴木啓之氏（AA研共同研究員・東京大学）の報告では、はじめにオスロ合意とオスロ体制を研究する目的が説明され、オスロ合意がパレスチナ問題の研究動向の転換点であり、一つの時代区分としての役割を担っている点、またオスロ・プロセスが批判対象となっている点が研究対象としての重要性を際立たせていると指摘がなされた。また、オスロ・プロセス、オスロ体制についての研究の動向と課題点、委任統治期研究をはじめ広範な分野からのパレスチナ/イスラエル研究の現状が示された。

質疑応答では、オスロ体制という言葉が示す意味合い、変容する主体と研究者の視点の変化の認識について議論が提起された。

江崎智絵氏（AA研共同研究員・防衛大学校）の報告は、国際関係論的視点からオスロ体制に関わるアクターや国家間関係の変容を問い直すことを目的とした。オスロ体制は国家主体中心の地域的安全保障体制であり、外的要因や中東諸国の内部変化からの影響により変容してきたことが示された。非国家主体の重要性、超国家的な共同体意識とその担い手を考察したうえで、新たな地域的安全保障体制の構築を必要とするイスラエルとアラブ諸国との関係正常化が進んでいるという指摘がなされた。

質疑応答では、ネゲブ・フォーラムの実効性、地域安全保障における非国家主体の位置付けについて等活発な議論が交わされた。

田浪亜央江氏（AA 研共同研究員・広島市立大学）の報告では、パレスチナにおける演劇活動の視点から、オスロ体制が形成したパレスチナ社会に対する考察が行われた。占領に対する抵抗に加え、国際社会が規定する平和構築への抵抗を示す表現や演劇関係者の発言に注目するという視点が示された。また、パレスチナの社会内部のマイノリティの抑圧を映し出す演劇は、パレスチナの大衆的な支持を得ているわけではないとも指摘された。

質疑応答では、インテッファダを経験した世代と現在の若年層の世代間のギャップやパレスチナ社会のユースムーブメントと演劇の関連性について幅広い視点からの議論が行われた。

虎熊 歩（早稲田大学大学院修士課程）

（以上）